

所 属	教育委員会 社会教育文化課		
担当(係)名	教育文化担当	内 線	3577

(款)10教育費	(項)7社会教育費	(目)(4)社会教育施設費
(明細書事業名) 現代陶芸美術館費 現代陶芸美術館企画展開催事業		

1 当初予算(要求)額(千円)

67,264

2 当初予算(決定)額(千円)

65,768

(前年度 52,000)

【財源内訳】

一般財源

53,000

その他

12,768

3 事業概要

岐阜県現代陶芸美術館企画展の開催方針

- ・岐阜県現代陶芸美術館の特徴を示す企画展
- ・県内出身の作家及び県ゆかりの作家の企画展
- ・現代陶芸美術館の位置付けに焦点を当てた企画展

1 開館記念展 (ロシア・アバンギャルドの陶芸 - モダン・デザインの実験 -)

< 期間 > 平成15年4月26日～7月27日

< 入館料(常設展示を含む) > (団体料金)

一般 1,200円(1,000円) 大学生 900円(700円)

小中高生 600円(400円)

2 フェスティバルの歩み展(仮称)

< 期間 > 平成15年9月6日～11月24日

< 入館料(常設展示を含む) > (団体料金)

一般 800円(700円) 高大学生 600円(500円)

小中生 400円(300円)

3 陶磁研究家小山富士夫の目・技・交友展(仮称)

< 期間 > 平成15年12月20日～平成16年3月21日

< 入館料(常設展示を含む) > (団体料金)

一般 1,000円(800円) 大学生 700円(500円)

小中高生 500円(300円)

4 施策の効果

「開館記念展 (ロシア・アバンギャルドの陶芸 - モダン・デザインの実験 -)」では、世界に先駆けて、ロシア・アバンギャルド芸術のひとつ「芸術と産業の融合」に照準を合わせモダンデザインを検証します。また、展示品の一部を県産品(食器・家具・衣服)により制作し、参加体験型の展覧会とします。(展示作品約200点)

「フェスティバルの歩み展(仮称)」では、「国際陶磁器展美濃」のこれまでの入賞作品が一堂に会することで、美濃展の歴史を辿り、現代陶芸の歴史の一面を垣間見ることができます。(展示作品約80点)

「陶磁研究家小山富士夫の目・技・交友展(仮称)」では、世界的な陶磁研究家として、また、陶芸家として知られる小山富士夫を、岐阜県とゆかりが深いその生涯を回顧しながら、交友のあった作家の作品とともに人物像を検証します。(展示作品約100点)

< 総観覧者の見込数 > 35,000人

<総開催日数> 222日
<一日目標観覧者数> 160人

5 要求の内容

・3つの企画展のための開催負担金及び県単独企画展のための印刷製本費、委託費等
・開催負担金は、実行委員会が支払う企画ギャランティ料の岐阜県負担分です。

1 「開館記念展 (ロシア・アバンギャルドの陶芸 - モダン・デザインの実験 -)」
(開催負担金)

アバンギャルド芸術のひとつ「芸術と産業の融合」に照準を合わせモダンデザインを検証します。また、展示品の一部を県産品(食器・家具・衣服)により制作し、参加体験型の展覧会とします。

2 「フェスティバルの歩み展(仮称)」(チラシ印刷費、看板制作等)

「国際陶磁器展美濃」のこれまでの入賞作品が一堂に会することによって、美濃展の歴史を辿り、現代陶芸の歴史の一面を垣間見る機会を提供します。

3 「陶磁研究家小山富士夫の目・技・交友展(仮称)」(開催負担金)

世界的な陶磁研究家として、また、陶芸家として知られる小山富士夫を、岐阜県とゆかりが深いその生涯を回顧しながら、交友のあった作家の作品とともに人物像を検証する機会を提供します。

6 用語の解説

<ロシア・アバンギャルド>

ロシアにおいて、20世紀初頭に未曾有のスケールで勃興した前衛芸術で、芸術と産業の融合を推進した一大ムーブメントである。

新たな芸術の創造を果たしながら長年封印されてきたが、近年、次第にその姿が明らかにされつつある。

当館では、世界に先駆け、その陶磁器におけるモダンデザインの展開を検証します。

<国際陶磁器展美濃>

「国際陶磁器フェスティバル美濃」において、昭和61年に多治見市にて第1回を開催し、以降平成14年度に第6回を開催した国際的陶磁器の展覧会(コンペティション:陶磁器デザイン部門・陶磁器部門)

<小山富士夫とは>

小山富士夫は1900年に岡山の貿易商の長男として生まれ、京都山科の真清水蔵六の下で作陶修行に入り、石黒宗麿、荒川豊蔵等と親交を結んだ。作陶修業を途中でやめ、東京にもどり、陶磁史研究にその情熱を向けた。国内外の名品をたずね、朝鮮、中国の窯址を歩き、幻の名窯、定窯々址を発見した。

戦後は文化財保護委員会に所属し、国宝・重要文化財の指定、そして日本の陶芸作家をほりおこし、その技術の顕彰と保存にあたった。また日本の陶芸を海外に紹介し、同時に出版、展覧会を企画し、陶磁史研究者を育てた。

晩年、作陶生活に入り、美濃の土岐の五斗蒔に「花ノ木窯」を築いた。(没1975)

7 決定内容

開館から3カ年は記念展が続き事業費も流動的となることが見込まれることから、当面平成17年度までの3カ年の県費負担額を設定したうえで、平成15年度事業費を精査し予算措置した。

決定額 65,768千円